

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「私」(陽菜)は音楽大学(音大)受験前に出場したコンクールで結果が出ず、打ちのめされる。思い悩むうちにまともに演奏できなくなった「私」は、姉の亜季(亜季姉)が住む奥瀬見を訪れ、オルガン製作をする工房に通うようになる。「私」はオルガン製作を通じて音楽と向き合い、亜季が金森さん、細田さん、祐子さんと組む(奥瀬見クイネット)に参加するようになる。

〈奥瀬見クイネット〉は、秋にコンサートをやることになった。

演奏会が終わったら、奥瀬見を去るつもりだ。

最近フルートを吹いても唇が震えたりはしない。そろそろ私も、自分の目標に向かって進む番だ。

「あれ？」

音楽室に近づいたところで、私は違和感を覚えた。中から、クラリネットの音が二種類聴こえてくる。しかも、片方の音は、やけに艶がある。

「よっ、亜季、陽菜。」

クラリネットの席に座る金森さんの横に、眼鏡をかけた背の低い女の子がいた。

「娘の玲だ。見学したいっていうから、つれてきた。」

「あつ、金森玲です。よろしくお願いします！」

慌てたように立ち上がり、ぺこりとお辞儀をする。幼い顔をしていて、私よりも年下のようだ。

「玲は高一でな、音大を目指してるんだ。陽菜の話したら、一緒に演奏したいって言いだして聞かなくなてな。まあ悪いが、面倒見てやってくれ。」

——音大。

どうりで、艶やかな音が聴こえてきたわけだ。

「よろしくお願いします、陽菜さん。色々教えてください。」

「あ、うん、そんな、教えることなんかないと思うけど……。」

「すごく上手だって。パパから聞きました。朝からメッチャ緊張してましたけど、頑張ります！」

玲ちゃん人は懐っこい笑顔を見せると、座って音出しをはじめる。

——上手い。

小柄な体格とは対照的に、ずしんと腹に響くような芯のある音を出す。力強いのに柔らかさもある、分厚い音色。細田さんも祐子さんも、玲ちゃんの美音に耳を惹かれていく。

①動悸が、高鳴る。

基礎練習を吹いているだけだが、音と音とが滑らかにつながり、きちんと作曲された音楽を聴いている気分になる。彼女の中に、生きた音楽が鳴っているからだ。どんな音を出したいのか、どんな音楽を表現したいのか、玲ちゃんの音からはぶれない意思が伝わってくる。

「じゃあ、最初は『クーブランの墓』からやりましょっか。」

音出しが終わったところで、亜季姉が言った。

一曲目、プレリユード。

隣に座る細田さんが、両手の指を動かしてかちやかちやとキーを動かしている。プレリユードはオーボエの難曲として有名な曲で、冒頭から延々とソロが続く。単に指が動けばいいのではなく、速い[※]パッセージの中で水が流れるような繊細さも表現しなければならない。

「オーケー。いつでもいいよ。」

細田さんの準備ができたところで、私は楽器を構え、ブレスを取って合図を出した。

オーボエのソロがはじまる。

細田さんは、器用な奏者ではない。ゆったりとしたメロディーを歌い込ませると絶品なのだけれど、この曲のように技巧的なパッセージを吹かせるとかなり雲行きが怪しくなる。

でも、今日の細田さんは、安定していた。難しい楽譜に苦戦してはいらぬものの、音楽の流れを滞らせずにすいすいと前に進んでいく。こんなに細密な演奏ができたんだと、私は少し驚いた。

いや。

——玲ちゃんがいるからだ。

②演奏の途中で、私は気づいた。冒頭から、オーボエとクラリネットの掛け合いが延々と続く。玲ちゃんは精密機械のように正確にテンポをキープして、[※]アンサンブルの土台をしっかりと支えている。対話相手が安

定しているから、細田さんも安心して吹けているのだ。

いまアンサンブルの中心にあるのは、金森玲という安定した船だった。クラリネットのソロ。

それまで裏方に隠れていた玲ちゃんの音が、一瞬で[※]ソリストの音になった。音色が一気に艶やかさを増し、フレーズを見事に歌い上げる。《奥瀬見クインテット》が、彼女の色に染まった。

次は、私のソロだ。私は息を肺の深いところまで吸い込み、長いフレーズに備えた。

——あ。

「……おっ？ ちょっと止めよう。」

亜季姉が言葉を挟み、演奏が止まった。せつかくいい流れで進んでいた音楽は、宙に消えてしまう。私は背もたれに身体を預けた。

「ごめんなさい。拍を間違えて、入れませんでした。」

「まあ、そういうこともあるよ。あたしもミスりまくっちゃってごめんなさい。もう一回冒頭からやりましょう。」

「すみません。次はちゃんとやります。」

私は謝って、もう一度フルートを構える。

唇が、震えた。

私は、ショックを受けた。もう、震えがくることは、ないと思っていたのに——。

すべての感情を押し殺して、私はブレスを取った。

休憩時間。なんとなく休憩所に行く気が起きず、フルートの席に座り続けていた私に、玲ちゃんが話しかけてきた。

「すごい吹きやすかったです。どんどんリードしてくれるし、音も色々持つてるし……ほんと、勉強になりました。」

「いや、こちらこそ、だよ。玲ちゃんはいま、高一だっけ？」

「そうです。ママと東京に住んでて、吹部やりながら、レッスン通つてます。パパは仕事忙しいみたいで、山梨にひとりで住んでるんです。」

「そうなんだ。私も実家は東京なんだ。」

「パパから聞いてます。陽菜先輩、うちに指導きてくださいよ。」

——高一、か。

そのころの私は、どんな演奏をしていたっけ。

音大受験のために、中学までやっていたブラスバンドをやめて、個人レッスン一本に絞ったころだった。楽しむためのフルートはもうやらないと、高校のブラスの誘いを蹴ったときに決意した。

でも、玲ちゃんは部活も真剣にやっているようだ。その上であれだけの演奏をして、しかも音大も目指している。私よりも、明らかに大きな器量を持っている。

「陽菜先輩は来年、どこを受験するんですか？」

それ以外の選択肢は、彼女の中には存在していないようだった。彼女が引いている〈当然〉のラインが、高い。

「やっぱ、^{げいだい}藝大かな。」^③ 私は内心を隠しながら、^{つぐや}呟いた。

「あー、やっぱそうですね。陽菜先輩なら受かると思いますよ。先輩つて、フルートだと誰が好きなんですか。」

「うーん色々好きな人がいて……どうしたの、ずいぶん聞くね。」

「こんな話ができる人がいなくて。私、メイエ様命なんですよ。」

確かに、玲ちゃんの柔らかく芯の強い音色は、フランスの名手、ポール・メイエを思いだす。

「メイエ様みたいなクラリネットを吹くのが夢なんです。」

ちよつとお茶買ってきます！ と言つて、玲ちゃんは出ていく。音楽室がしんと静まり返った。

静寂の中、私は膝の上に置いたフルートを手に取り、構えた。

^④ リッププレートに当たった唇が、小刻みに震えている。

無理やりそのまま、音を出す。フルートから出る音はみつともなく震えたまま、発したそばから床のほうに落ちてしまう。私は、フルートを膝の上に戻した。カチカチと、歯が鳴った。

コンクールのことが、^{いやおう}否応なく頭の中で[※]リフレインする。玲ちゃんの、才氣溢れるクラリネットが、あの日のことを呼び覚ます。

私は、忘れていた。私が抱えている問題が、何ひとつ解決していないことを。

あのコンクールのあと——私は、必死に〈個性〉を探した。
[※] パユを聴いた。

ランパルを聴いた。ゴールウェイを聴いた。ニコレを、ツェラーを、

高木綾子たかぎあやこを、有田正広ありたまさひろを、ジャズのフルートから古楽の演奏まで、フルートを聴き続けた。そのどれもが素晴らしかった。それぞれに違った個性があつて、優劣がつけられなかった。私は玲ちゃんのように、メイエ様が一番と、無邪気に言うことができない。

——私には、嫌いなものがない。

ブラスバンド部の同級生は、プロの演奏に対しても嫌いだとか下手くそだとか、平気で言っていた。自分のことを棚に上げたそういう態度が私はすごく嫌だったけれど、もしかしたら、おかしいのは私のほうなのかもしれない。

嫌いなものがない。それは、好きなものがないことと同じではないか。

自分の音楽が、ないことと。

「陽菜せんばーい。」

玲ちゃんを先頭に、休憩所にいたメンバーが帰ってくる。

「陽菜、玲の高校に教えにきてくれるんだって？ 忙しいところ、悪いな。」

「え、ちょっと待ってください。私、そんなこと……。」

「陽菜先輩、きてくれないんですか？」

玲ちゃんが悪戯いたずらっぽく首をかしげる。可愛らしいけれど、こういうところ

は金森さんの娘だ。したたかさは、彼女の演奏ともつながっている

気がする。強い音楽。強い個性。

「判わかったよ。来年くらいに落ち着いたら、声かけて。」

「わーい。約束ですよ。」

嬉うれしそうに微笑ほほえんでくる彼女に向かって、私は無理やり笑顔を作った。

（逸木裕著『風を彩る怪物』による。一部省略がある。）

（注） ※パッセージ……楽曲の一節。

※アンサンブル……小人数の合奏。

※ソリスト……独奏者。独奏（ソロ）をする人。

※リフレイン……繰り返すこと。

※バユ……フルート奏者。以下、「ランパル」「ゴールウェイ」「ニ

コレ」「ツエラー」「高木綾子たかぎあやこ」「有田正広ありたまさひろ」も同じ。

問5 本文の内容や表現について述べた文として適切でないものを、次のア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。

ア 「小柄な体格とは対照的に、ずしんと腹に響くような芯のある音を出す。」のように対句を用いて表現することで、比較された双方がより印象的に伝わるようになっている。

イ 「水が流れるような繊細さ」や、「精密機械のように正確にテンポをキープして」という比喻表現によって、演奏されている曲や演奏している状況がイメージしやすくなっている。

ウ 「パユを聴いた。」から「ニコレを、ツエラーを、高木綾子を、たかぎあやこ有田正広を」までの部分では、具体的な人物名を列挙し、「私」が様々な演奏を聴いたことが表現されている。

エ 「したたかさは、彼女の演奏ともつながっている気がする。」という表現によって、「私」に対抗心を向ける玲ちゃんに、「私」が見下した態度で接していることを印象づけている。

オ 本文は、作品中の登場人物である「私」が語り手となって展開しており、「無邪気に言うことができない。」のように、会話文以外でも「私」の思いや考えが表現されている。

問 5				問 4	問 3					問 2	問 1
(					(						(
)					)						)
と											
(											
)											

問 1 (イ)

問 2 (例) アンサンブルの土台を支えているから、細田さんが音楽の流れを滞らせずに安心して吹けている

問 3 (ア)

問 4 (例) コンクールのが呼び覚まされ、自分には個性や自分の音楽がないことを思い出した

問 5 (ア) (と) (エ)

〈備考〉 問 2 ○内容・表現に応じて、部分点を認める。

問 4 ○内容・表現に応じて、部分点を認める。

○「コンクール」「個性」のうち、いずれか一語しか使われていない場合

合は4点を減じ、二語とも使われていない場合は、点を与えない。

問1 まず、傍線部「動悸が、高鳴る」きっかけとなった玲ちゃんのクラリネットの演奏がどのようなものだったかについて整理すると、「彼女の中に、生きた音楽」が鳴っていて、「どんな音を出したいのか、どんな音楽を表現したいのか、玲ちゃんの音からはぶれない意思が伝わってくる」と書かれている。次に陽菜の状態を整理すると、音楽大学の受験前に出場したコンクールで結果が出ず、ともに演奏できない日が続き、必死に〈個性〉を探すためにあらゆる人の演奏を聴いたが、自分の音楽は見つけられていない状態だった。自分よりも年下の玲ちゃん、すでに自分の音楽を見つけていると感じて、陽菜は心を乱しているのだと考えられる。

問2 直前にある「玲ちゃんがいるからだ」という部分が、「私」が「気づいた」内容である。「技巧的なパッセージを吹かせるとかなり雲行きが怪しくなる」細田さんの普段の演奏と違い、この日は「繊細な演奏」をできている理由は、「玲ちゃんがいるからだ」と気づいたのだ。玲ちゃんが「精密機械のように正確にテンポをキープして、アンサンブルの土台をしっかり支えている」から、細田さんが安心して吹けていると感じたのである。

問3 傍線部の直前にある「彼女が引いている〈当然〉のラインが、高い」とは、音楽大学を受験するのが「当然」のことだと思っていることを表している。それに対して、陽菜はコンクール以降ともに演奏もできない状態で、どの音楽大学を受験するかどころか、受験するかどうかさえはつきり話すことができない状態なのである。したがって、**ア**が正解。

問4 **ポイント** コンクールで結果が出せず落ち込んでいた陽菜だが、「最近フルートを吹いても唇が震えたりはしない」と書かれている。つまり、この場面で唇が震えたのは、コンクール直後と同じような心情になったからだと考えられる。それは、傍線部の後にある「玲ちゃんの、才気溢れるクラリネットが、あの日のことを呼び覚ます」という部分からも読み取れる。コンクールのことが思い出され、また、その後、個性も自分の音楽も見つからないまま自信を失っている陽菜の心情が、震えとなってあらわれているのである。